



## 新潟県の弥生時代の玉作遺跡

田海 義正（新潟県教育庁文化行政課）

新潟県では57遺跡で弥生時代の玉作関係資料が出土あるいは採集されている。越後では32遺跡、佐渡は25遺跡が挙げられる。越後の玉作遺跡の多くは海岸近くに位置し、内陸部では信濃川沿いの長岡市で2遺跡、十日町市で1遺跡、阿賀野川に近い五泉市で1遺跡の計4遺跡がある。佐渡では大佐渡と小佐渡山地に挟まれた国中平野と周辺に玉作遺跡（19遺跡）が集中する。

越後の玉作 前期は糸魚川市大塚遺跡からヒスイや滑石の玉素材、未成品が出土しているが、その玉製作技法は縄文の伝統を受け継ぐものである。中期では柏崎市下谷地遺跡で管玉製作工程を復元できる資料が検出され、上越市吹上遺跡では竪穴状遺構や土坑、小型掘立柱建物からなる玉作工房群が検出され、緑色凝灰岩の管玉とヒスイ製勾玉製作資料が出土した。三島郡和島村大武遺跡では、側縁に施溝打割痕を持つ管玉工程品が出土した。土器は下谷地遺跡に先行する。後期の糸魚川市後生山遺跡では工房とみられる3基の竪穴住居跡が発見され、円形プランの1号住居跡では中央のピットから放射状に4本の溝が延びる。床面からヒスイ原石や緑色凝灰岩、鉄石英剥片が出土した。上越市内では裏山遺跡・下馬場遺跡で同様の玉作がある。

佐渡の玉作 新潟県指定史跡新穂玉作遺跡に代表される中期の佐渡の玉作遺跡は、北陸地方でも屈指の規模を誇る。新穂村教育委員会の確認調査では45万㎡以上に広がる。その特徴は緑色凝灰岩の管玉に加え、鉄石英（赤玉石）の管玉を多量に製作している点と新穂技法と呼ばれる製作技法にある。平成8・9年に発掘調査された平田遺跡では、新穂技法にみられる端部への施溝分割と角柱状剥片稜への押圧剥離が先述の両石材と管玉穿孔具（石針）に用いられていた。鉄石英の管玉製作では10cm大の転石や漂石等が素材となる。加工では角柱状剥片278点のうち端部に擦切溝を持つものは、152点（55%）あり、施溝分割の積極的な利用が窺える。管玉穿孔の石針材は普通輝石安山岩と呼ばれ、10cm以下の転石等が利用されている。角柱状剥片を得る製作工程で施溝分割技術が最もよく取り入れられ、実は石針の製作工程（円柱を作った段階までだが）でこそ典型的な新穂技法の製作モデルが示される。石針には円柱形と円錐形の2形態がある。使い分けは不明だが、円錐形は太い方が作用面で、使用されたものは先端部が僅かに窪む。施溝分割に用いられる擦切具（石鋸）は小佐渡に産する板状に剥離する流紋岩が選ばれる。砥石は仕上げに軟質な緑色凝灰岩で中砥には砂岩・安山岩が使われる。管玉への利用石材は全て佐渡に産する。観察をまとめると、施溝部位は各工程とも端部（頭部）に集中する。穿孔方向は片方向を基本とし、両側穿孔は少ない。両側穿孔の場合も中央部で連結するものはなく、一方の深さが足りない場合に補足的に行う。分割・穿孔共に金属器の使用は認められない。製品は緑色凝灰岩で長さ9～14.7mm、太さ2.1～3mm。鉄石英は12.7～14.8mm、太さ2.4～2.6mmと細い。佐渡製管玉の流通はほとんど未解明だが、外面形状の観察と穿孔方法の検証を通し、消費遺跡の情報を共有化できる可能性がある。佐渡では管玉類の生産は中期に開始されたとみられるが、発掘調査例が少なく、始まりを明らかにし得ない。また、玉生産開始から間もない中期後半には、遺跡数からみて最盛期を迎えたと思われる。後期の玉作遺跡も少数あるが、生産は明らかに衰退したものとみられる。

図1 越後と佐渡の主な弥生時代玉作遺跡

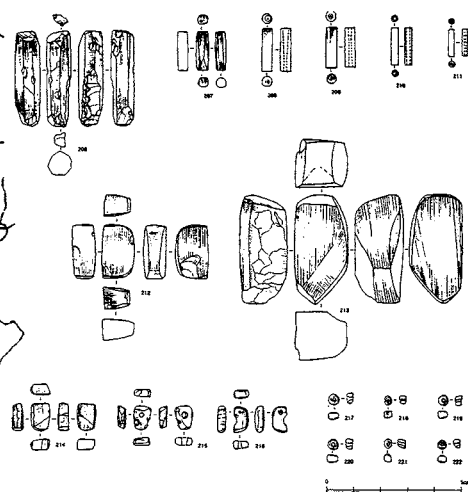
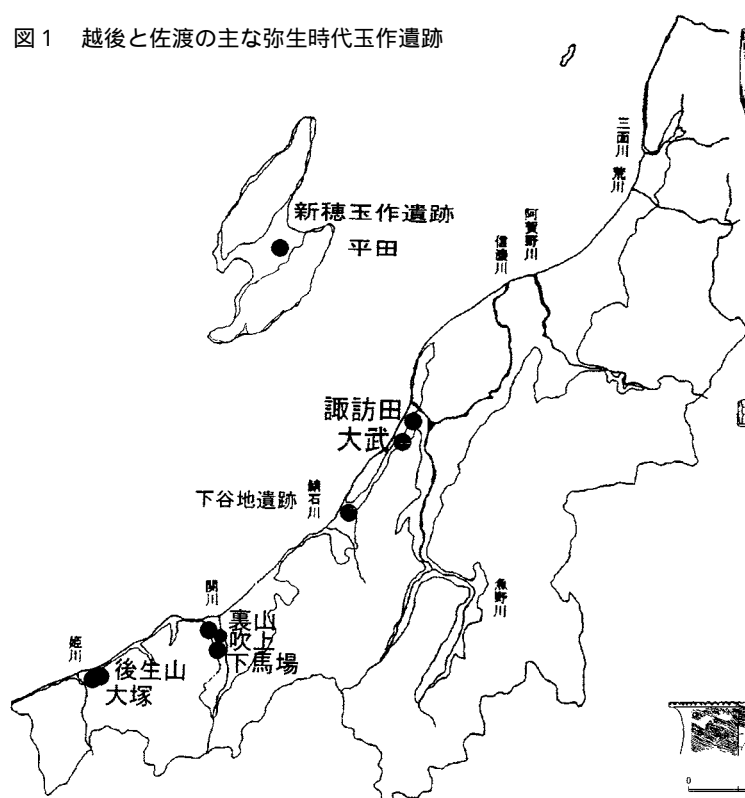


図2 裏山遺跡出土玉関係遺物

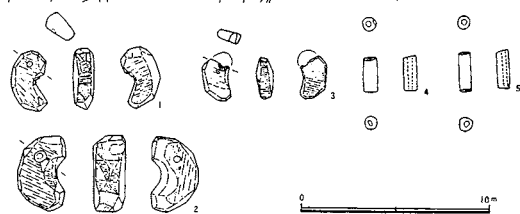
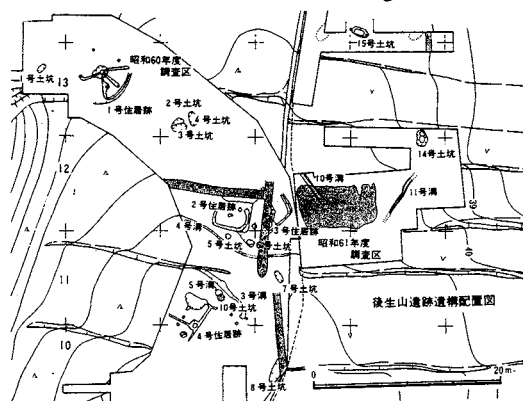


図5 後生山遺跡遺構配置と出土遺物

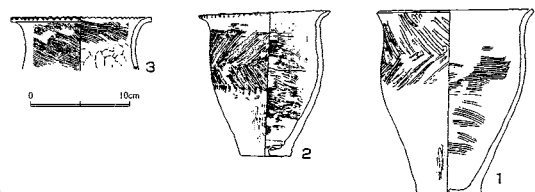
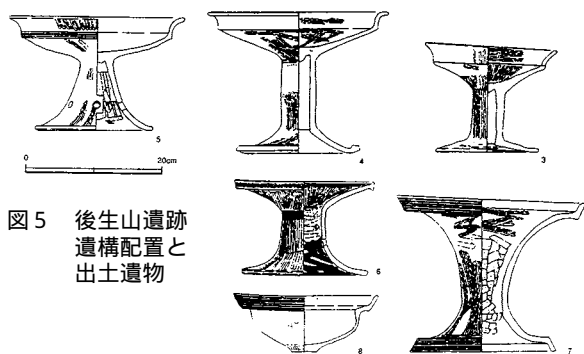


図3 吹山遺跡出土遺物

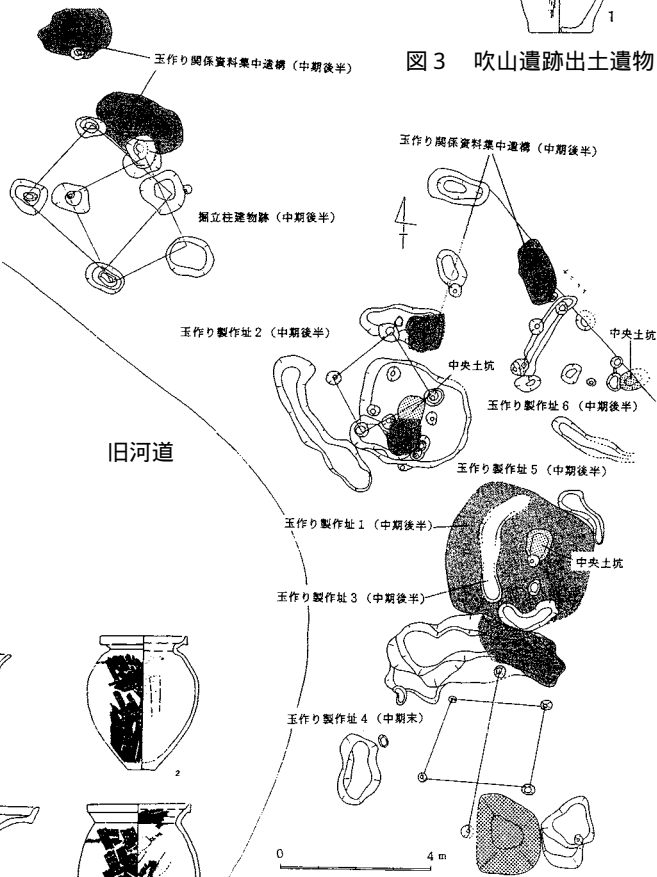


図4 吹山遺跡玉作り工房群と関連遺構

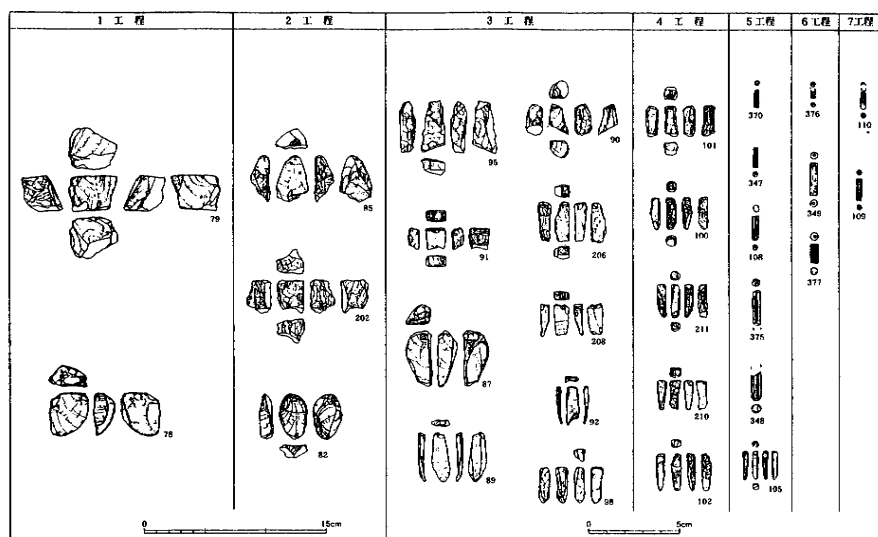


図6 平田遺跡 管玉製作工程 (鉄石英)

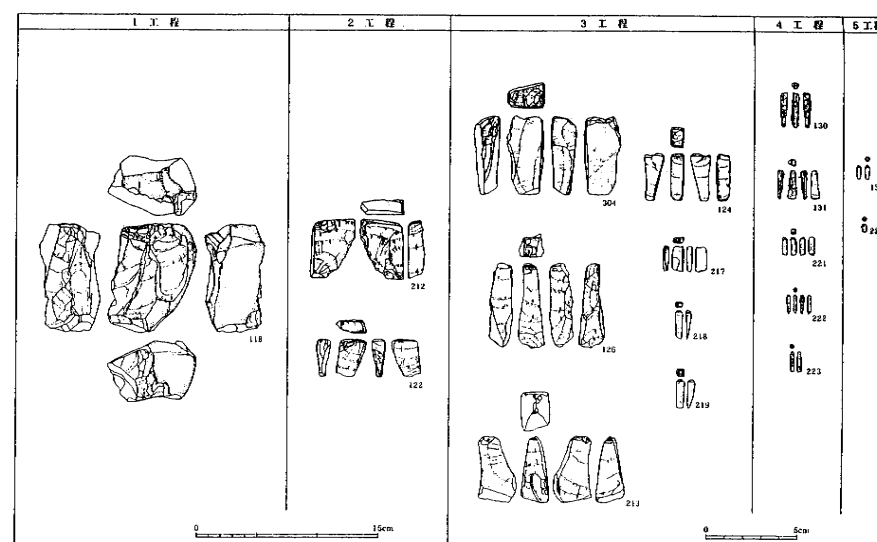


図7 平田遺跡石針製作工程

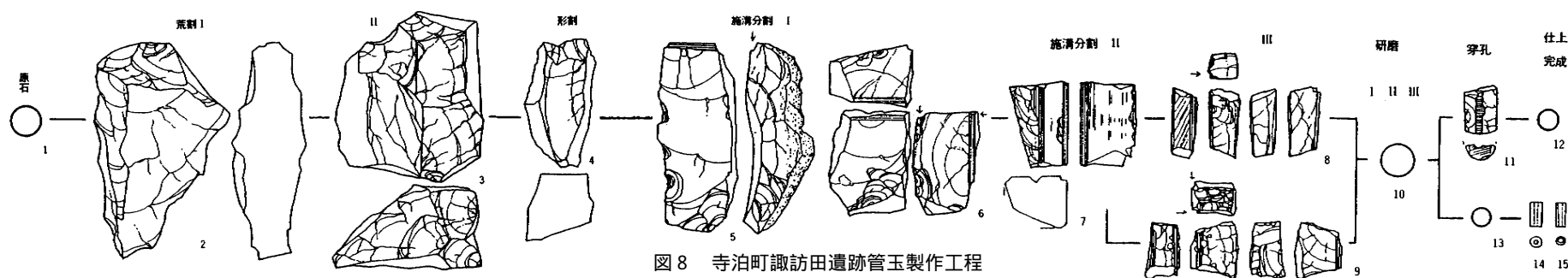


図8 寺泊町諏訪田遺跡管玉製作工程

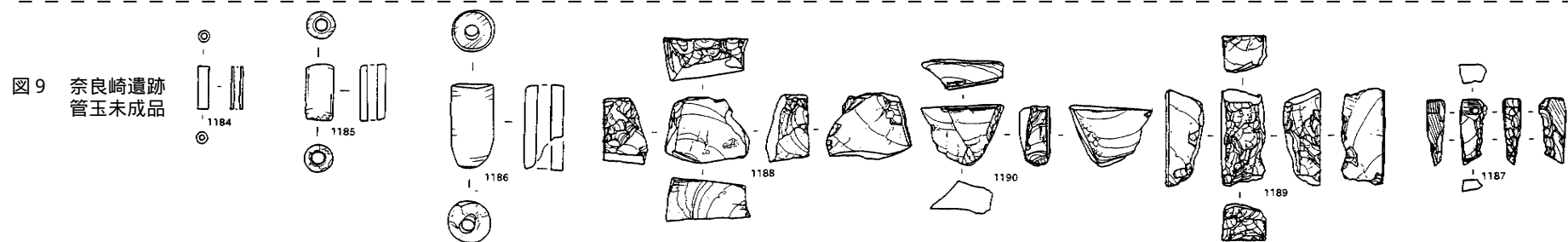


図9 奈良遺跡 管玉未成品